

「揺れながら到達する確固たる救い」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

July.19.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

ここしばらく、主なる神様が私たちのために備えて下さった6つの神の武具について学んでおりますが、今朝は、先週に続き、「救いのかぶとをかぶる」ということについて、もう少し考えて行きたいと思います。

「救いのかぶとをかぶる」とは、「救いの**望み**というかぶとをかぶることだ」と確認いたしました。

つまり、「救われた」という一度過去に経験した救いの体験で終わるものではなく、「到達する救い、達成する救い」があるということです。

「到達する救い、達成する救い」に至るまで、多くの試練や誘惑、疲弊や落胆があるけれども、イエス・キリストにある救いの完成があることを確かに知り、そこへと行き着くことを見据えながら望み、その望みと確信の中で主イエス様を着続けること、これが「救いのかぶとをかぶる」ということだと確認いたしました。

キリスト者としてこの世を生きることには、挫折や失敗や転び倒れる要素があまりにも多いため、救いのかぶとをかぶることが私たちには必須です。

また、救いのかぶとをかぶることを辞めてしまうことは、戦場において頭を刺され、頭を撃たれたことと同じであり、挫折し、失敗し、転び、「もういいよ。もう十分だよ。もう辞めた」という霊的意識不明の重体に至ることと同じだと、そこから私たちを守ってくれるのが、「救いのかぶと」だということも確認いたしました。

Part One

あるクリスチャンの方の話なのですが、この方が、初めてイエス様を信じた当初には、嬉しさしかなく、いつも喜んでいて、いつも笑っていたそうです。

そして、その喜んでる姿こそが、この方にとっては信仰者としての証であり、クリスチャンらしさでした。

周りの人がこの方に、「何かいつも嬉しそうだけど、なんでそんなに幸せそうに笑えるの？」と尋ねると、「あなたもイエス様信じてごらん。そこには平安があって、喜びしかないから。何か落ち込んだり、困難だと思えることがあるのかなと思えてしまうから」と答えていたそうです。

ところが、幸か不幸かある牧師先生に出会って、この方の信仰が、喜びや幸せな気持ちから、悩みと葛藤へと変わって行ったそうです。

でも、「それこそが事実、聖書の語っている正当なことだと思えるようにな

った」と仰っていました。

私も、この方と同じようなことを体験いたしました。

この方が出会った同じ牧師先生に出会い、同じ牧師先生のメッセージを聞き、講義を聞き始めた時から、信仰者として、安心して悩み、安心して葛藤し、安心して絶望することが出来るようになりました。

また聖書を、私の期待や理想や、私の中で勝手に作り上げた「キリスト教とは、キリスト教信仰とは、聖書はこうであるはずだ」というメルヘンチックなお飾りのような装飾を取っ払って、ドロドロとしたところを真っ直ぐ見ることが、真っ直ぐ見ようと思えるようになりました。

そして、自分自身のドロドロとしたところを、安心して、正直に向き合うことが、向き合おうと思えるようになりました。

その時から、本当の意味で、聖書を読めるようになったような気が致します。

聖書に描かれているどす黒く生々しい人間臭さから目をそらすことなく、隠すことなく、隠れることなく、自分事として捉え、感じ、見ようとする事が出来るようになったように思います。

そして、そんなきっかけを作って下さった牧師先生とは、私も学び、今神田明美先生が学んでおられる神学校の説教学と牧会学の先生でした。

この先生が私たち神学生によく口酸っぱく話されていたのが、「頼むから、子どもたちに語るおとぎ話のような説教はしないでくれ！ 本当に聖書がそう言っているか？ そんな何でもかんでも上手くいくとか、喜んでいられるとか、いつも笑顔で居られるとか、そんなことばかりを本当に聖書は言っているか？ むしろ、その逆を言っていないか？ 信仰生活は、幸せで喜びの連続であるというよりも、はるかに多くの葛藤と悩みの連続だと言っていないか？ なんでそれを語らない。それを語らないから、いつまで経っても、幼稚な説教しか出来ないし、幼稚な聞き手しか育たないんだよ」と、真剣さゆえの愛の毒舌を吐いて下さっていました。

確かに、聖書は語って下さいます。

私たちの信仰生活は、葛藤と悩みと試みの連続だということをです。

それは、この暗闇の世界の支配者たち・悪魔悪霊どもが、私たちが到達しようとする救いを、何としてでも妨げようとするがために生じるものだと、先週まで確認してきました。

では、何で神様は、そういう葛藤と悩みと試練を放っておかれるのか。

それは、「その過程を通してこそ、私たちが救いの完成に至るために必要なものたちが、造り上げられていくからだ」と、聖書は教えて下さいます。

「最後まで耐え忍ぶ人は救われます」(マタイ 24:13)とイエス様は説き、「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきてを学びました」(詩篇 119:71)と詩篇の作者は告白し、「苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、

練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです」(ローマ 5:3-4) と使徒パウロ先生が仰っている通りです。

Part Two

牧師館にある私の仕事部屋から、田んぼ一面に広がる稲や、桜川の土手沿いに植えられた桜の木を始めとする色んな種類の木が、毎日よく目に入ってくるのですが、稲も木も同じようにほぼ毎日していることがあります。

揺れることです。

揺らされている姿です。

風に吹かれて、揺れています。

台風の時なんか折れてしまうんじゃないかと思う程に揺れていますし、時には折れてしまうこともあります。

でも、その揺れる・揺らされることを通して、稲も、木も成長していることを発見します。

揺れることをもって、揺らされることをもって、稲も木も根を張って行っていることを気付かされます。

稲是一年草ですので、成長は一年で終わりますが、木の寿命は、私たち人間にはよく分からない程長いものであることを、私たちは知っています。

木は毎日、毎週、毎年、何年もの間揺れながら、揺さぶられながら、根を深く下ろしていきます。

そして遂に、どんなに揺さぶられても倒れることのない木へと成長していきます。

全然揺れたことのない木が、丈夫で強い木ではなく、揺れ、揺さぶられながら根を深く下ろして行った木が、丈夫で強い木となっていきます。

「救いの望みとかぶとをかぶる」ということを思い巡らしていますと、私たちの人生も、私たち信仰者の人生も、同じではないかと思わされました。

私たちは、揺れながら、揺さぶられながら、主イエス様に、父なる神様に、聖霊様に、もっと深く根を下ろして行くように思います。

私の仕事部屋から、成田空港に着陸しようとする飛行機を一日に何度も見るのですが、飛行機は、空で、揺られながら目的地を目指して飛んでいきます。

船も、波に揺られながら、大海原を航海します。

揺れる、揺るがされるというと、あたかも失敗のように思えてしまうかもしれませんが、揺れること、揺さぶられることは失敗ではありません。

道を見失ったということでもありません。

揺れても、揺さぶられても、進むべき方向を見失わなければ大丈夫です。

揺れても、揺さぶられても、イエス様をしっかり掴んでいれば、先週見ましたローマ書 13 章にありますように、主イエス・キリストを着続け、光の武具を身に着け続けるならば、進むべき道を見失わないでしょう。

Part Three

また考えてみます地、揺れるということには、二つの顔があるように思います。

揺れるということが否定的に働きますと、不安に陥りますし、恐怖を覚えま
すし、落胆します。

信仰まで、グラグラと揺さぶられてしまいます。

ですが、揺れるということが肯定的に働きますと、私たちの目を覚まさせて
くれるように思います。

高慢や驕りを下ろすように働きますし、父なる神、御子なるイエス、聖霊な
る神様なくして生きることが出来ないという事実を学ぶように思います。

揺れるということを肯定的に働かせると、人よりも自分が先に謙遜になるこ
とを躊躇なく選び取って行き、神の御前に自らを遜らせ、祈りの場へと出て行
くようになります。

強風が吹くと、丈夫なのとは違う、ただ堅い木は折れてしまいますが、揺れ
ることを知っている木は、折れません。

私たちの人生も、私たちの信仰も然りのように思います。

揺れることを知っている人は、環境や状況を理由にするよりも、現実を認め
ます。

そして、その現実の中で、主なる神様に、主イエス様に根を下ろしていきま
す。

聖書のまん真ん中にどんと置かれている詩篇 150 篇の半数以上をダビデと
いう方が書いたものですが、そのダビデの詩篇を見ますと、ダビデという方は、
その人生の中で、揺れる・揺さぶられる日をたくさん過ごした方であることが
分かります。

一国の王から、国賊として終われ、長きに渡って不当にいのちを狙われる
日々を生きたこともありました。

息子のアブサロムに謀反を起こされ、王座から引きずり降ろされて、荒野に
追放されたこともありました。

人として最低の罪を犯し、その深い罪責感の中で、二度と立ち上がれないの
ではないかと思えるほどに、沈んだこともありました。

寂しさ侘しさの中で、幾度となく夜を過ごしたこともありました。

ところが、このダビデの凄いなあと思うところは、揺れない、揺さぶられな
いということではなく、揺れた時、揺さぶられた時、神に祈り倒すというところ
です。

祈るんです。

ダビデは、このように祈りました。

詩篇 6 1 : 2 (パワポ)

「私の心が衰え果てるとき」、つまり、最底辺の時、最悪の時、なんの喜びもない、なんの希望も感じない、なんの見込みもない時、ダビデは、神を呼び求めました。

「困った時の神頼み」、大いに結構な祈りを献げました。

揺れ、揺さぶられている人の祈りです。

心が衰え果てた時、祈った祈りです。

「及びがたいほど高い岩の上」、即ち、「神のみもとへと、私を導いて下さい」という、神に根を下ろし、神に根を張っていく祈りです。

またダビデは、こうも告白します。

詩篇 6 2 : 1 (パワポ)

ぐらんぐらん揺れる、揺さぶられる状況の中で、たましいが黙って落ち着いていられる道は、ただ神だけを見上げ、ただ神を待ち望むことです。

外側は揺れていても、内なる人は、神にあって静かで穏やかである道が、ただ神を待ち望む、神に根を張り、神に根を下ろすことです。

そして、こう歌います。

詩篇 6 2 : 2 (パワポ)

外なる人は、例えぐらんぐらん揺れていても、内なる人は、「揺るがされない」と告白出来ます。

そして、心衰え果てた時でも内なる人が出来る、「救いのかぶとをかぶる」という行いがあります。

詩篇 6 2 : 5 (パワポ)

胸を叩きながら、自分のたましいに言い聞かせながら、内なる人が出来ることを、自らのたましいに語り掛けます。

「私のたましいよ。黙って、ただ神を待ち望め。私の望みは神から来るからだ。」

これが、揺れても揺れない、揺れることを肯定的に働かせる姿なのだと思います。

救いの望みというかぶとをかぶり続ける、祈る信仰者の姿なのだと思います。

Part Four

私は、お年を召したカッコいいクリスチャンに出会くと、一様に同じことを感じるがあります。

静けさです。

その人生において幾度となく揺れ、揺さぶられて来ただろうけれども、確固として静けさを感じるのです。

痛みが無かった、無いわけがありません。

今も揺さぶられているかもしれません。

傷が無いわけでもありません。

むしろ、沢山の風や波をご経験された方たちだと思います。

にもかかわらず、その方々の内には、一様に深い静けさがあることを、そのお姿から感じるがあります。

その静けさは、諦めではありません。

目が輝いておりますから。

また、悟りでもありません。

自らの経験や経歴を誇る目の輝きとは違います。

信仰です。

神への信頼です。

今ある揺れ、今ある問題よりも、はるかに大きな主なる神様を見上げることが、その方の中心にある静けさです。

そして、祈りの力を知っている静けさです。

揺れる時の祈りが、自分の力でどうにかしようとする手を下ろさせ、神の手につかまれる恵みを知っておられる静けさです。

揺れる時、揺さぶられる時一番危ないのは、揺れ、揺さぶられることではなく、祈りを忘れることだということを知っておられる静けさです。

私たちは、祈りを失うと、揺れることが恐怖となります。

でも、祈れば、揺れることは、神の恵みの御座へとさらに近づく通路となります。

イエス様が、荒れる海を静めなされたように、主なる神様は、揺れる時に献げる私たちの祈りに、波風を静めるという方法をもって答えて下さることがある一方で、周りの波風よりも先に、私たちのたましいを静めて下さることがあります。

私自身にとっては、こちらの方がはるかに多いように思いますが、皆さんはどうでしょうか。

状況がすぐに変わらなくても、神様が私たちの中に、平安を下されます。

Conclusion

神様は、揺れる私たちを、お叱りになることはありません。

むしろ、支えて下さいます。

詩篇 55 : 22 (パウロ)

神様は、揺れる揺るがされる私たちを、決して捨てるようなことはなさいません。

揺れている時にも、揺るがされている時にも支えて下さいます。
支えて下さるお方です。

だから、揺れる日々に、気を落とす必要はありません。

揺れる日々、揺るがされる日々は、根を下ろす日です。

祈る日です。

揺れる日々は、もっと深く神と出会う日です。

揺れること、揺さぶられることは、物事の失敗や終焉ではありません。

揺れ、揺さぶられることは、さらに深い信仰へと入る門です。

そして、揺れる、揺さぶられる日々の中で、神に根を下ろし続けることが、救いという望みのかぶとをかぶり続けることであり、救いを達成し、到達する救いに至る道なのだと思います。

私たちは、揺れながら、確固たる救いに到達するのです。

その道のり、主イエス様が、父なる神様が、聖霊なる神様が必ずいて下さっていることをいつも忘れることなく、歩んで行きたいなと願います。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇 62：1